

海 外 の 山



## 冬のマッキンレー登山

西 前 四 郎

山麓のアサバスカ・インディアンがデナリ（大きい山）と呼んできたマッキンレー峯が、北米大陸の最高峯として認められたのは、そう古いことではない。1897年、アブルッチ公がセントエライアス峯へ遠征隊を率いたときには、まだマッキンレー峯の高さは確認されていなかったらしい。セントエライアス峯の方には1886年から1897年までの間に、六つもの登山隊がくり出され、その秀麗な山容を広く知られていたのであるが、マッキンレー峯に最初の登山隊がいったのは、1903年のことであり、その頂きが登られたのは1910年になってからである。

大エクスペディションと呼ぶにふさわしい日数と費用をかけ、アルプスのガイド多数をまじえた大部隊で登られたセントエライアス峯とは対照的に、マッキンレー峯は技術的な登山の知識など持ちあわせていない、三人のサウドウ（アラスカ開拓時代の古強者）の隊によって登られたのだった。天候に恵まれるという幸運もあったが、彼等はこの亜極地の荒野に住みなれ、自分達なりに氷雪の中で生きる技術を身につけ、探鉱のために氷河を登降することにも馴れた冒険者だった。

彼等のとったマルドロー氷河からカーステン尾根を経てデナリ・パスにいたるルートは、その後40年間、後続の登頂パーティーに踏襲され、今日もくりかえし登られているし、冬の間には犬ぞりを駆って物資を運びあげた彼等は、まだ寒気のきびしい四月上旬、11,500フィート点の雪洞から一気に19,470フィートの北峯をアタックスしている。この高度で、高距八千フィートの行動というのは人間業とも思われないが、彼等は目印しにするために16フィートの重いエゾ松の丸太をかつぎ上げ、北峯直下に立てたのだった。

しかし、もともと登山家でないアンダースンとテイラーの二人（他の一人マクゴナガルは山腹までしか同行しなかった）は南峯（20,320フィート）には無理に登ろうともせず下ったため、本当の北米の最高点はさらに1913年まで未踏のままだった。

最高点、南峯の登頂年代記をひらくと、初登が1913年、第二登が1923年と、第二次大戦直後までは誠に了々たるものであるが、次の1947年以降にはほとんど毎年登られており、1960年の明大隊が第十六登、1965年の関西登高会隊が第三十九登ということになる。

開拓期と違って、この大半は軽飛行機を使い、ウェスト・パットレスから登られたのであるが、1951年ウオッシュバーンらによってこのルートがひらかれたのをかわきりに、続々とバリエーション・ルートが登られ、北米最高の登攀といわれた南壁中央稜は1961年、カシンのひきいるイタリア隊によってなされ、不気味な北壁中央部も、1965年ハーバード大学隊によって登られてしまった。

まだ興味あるバリエーションとして残っているのは、カシン・ルートの右（東）、南壁ダイレクト・ルートが一応考えられるが、これは技術的な難しさと共に、常にチリ雪崩にさらされる危

険もある「わるい」ルートである。

こうしてみると、山の知識が蓄積され、用具や食料が年々改良されている現在、冬季登山がこのマッキンレーでも考えられるのは、当然のなりゆきだった。

マッキンレー冬季登山という一見突拍子もないアイデアを最初に出したのは、アンカレッチのドクター・ウィックマンだった。彼はかねがね山仲間からプロフェッショナル・アジテーターという異名を捧げられており、若手のクライマーに山行のアイデアを与えては焚きつけておいて、それがいよいよ実現となると最後に飛び入り参加するのをお得意芸としている。建設ブームや自動車事故で怪我人の多いアンガレッチ地区にたった二人しかいない骨折医の一人が、このジョージ・ウィックマンで街にいる限り、日曜・祭日なしで仕事に追まわられることになっている。だから彼のいい方でいくと、毎年のヨーロッパ旅行も、年何回かの山旅も「生活必需品」なのである。

ジョージにまず焚きつけられたのは、コロラドからやってきた風来坊のアート・デイヴィツドンだった。1965年夏の私達のマッキンレー遠征に特別参加し、大いに働いてくれたのだったが、最後の段階でお腹をこわして結局登頂をのがしてしまった直後だけにジョージのアジに一遍にくいついた次第である。そういえば 当のジョージも、1965年の四月、マッキンレーの18,000フィートまで迫りながら、暴風雪のためここで一週間閉じ込められた上、頂上を諦めなければならなかった経験をもっている。

1965年にはまだ若かったアートも、1966年には、四月、マーカスベーカー第二登、グード初登、六月、シアトル峯初登、七月、キング峯経由のローガン峯、九月、カシードラル・スパイアー初登と稼ぎまくり、大きく成長していた。

遠征となればいづこも同じで財政面は苦しかったが、アートの友人グレッグ・ブロンバーグが隊のオルガナイザーを引受け、コロラドという土地柄を利用して多くの装備をメーカーから集めてくれた。

アンカレッチから参加したのは、ジョージ・ウィックマンに、東部出身のデイヴ・ジョンストン、スイス人のレイ・ジェネ、フランス人のジャック・バトキン、それに日本人の私。他にニュージーランド人でオハイオ州立大生物学教授ジョン・エドワードが加わって、総勢八人がフェアバンクスに揃ったのは1967年一月下旬のことだった。ここで私達は、隊の食糧一切を引受けくれた極北生物研究所及び極北保健リサーチ・センターへ日参して、さまざまなテストをうけたが、この人体実験料約二百ドルも貧乏学生の私には大きな収入だった。

夏のマッキンレー頂上を踏んだことのあるディヴと私には、バリエーション・ルートを、という気がなくてもなかったが、大勢は手堅く攻めようという意見だった。それに、何よりも痛かったのは隊員お互いの技倆が未知であり、冬のマッキンレーの状態も未知だということであった。マッキンレーに限らず、アラスカの山々に、冬、足を踏み入れた記録は全然ないのである。

アンカレッチのポール・クルーヤボストンのブラッドフォード・ウォッシュバーンなどは、二

月のマッキンレーでは非常に安定した好天に恵まれるだろうといていたが、同時に時速100マイルの風や零下九十度（華氏）の気温にも遭遇するというので、実際にこの両方ともほぼ当たっていた。

惜しい機会であったが、私達のような段階では、一般ルートともいうべきウエスト・パットレスへ行く他なく、北面のすっきりした尾根のルートや、東・南面の長いパットレスのルートは次の段階の仕事になるだろう。そして、冬の南壁や北壁に登られるのには、別な攻撃方法が開発されなければならない。

前置きの方が長くなってしまったが、私達のタクティクスは、全員で何もかも担げるだけ担いであがるといった極地法以前のものだった。登山を始めてみて、やっとわかったのであるが、誰一人として、極地法のやり方、考え方に慣れていないのである。もちろんアメリカ人に特に強い、個人主義的な性向がこれにあわないこともあるが、現実、隊を上へ工作に出る者、下へボッカにおりる者とわけなければならなくなったときに、討論のベースとして極地法のアイディアがあるのと、ないのでは大変な違いがあり、食料・燃料及び人員の配置を考えるのに、ツー・カーといかなくて、そのたびにイライラさせられた。

二月も下旬にはいる頃、ようやくしっかりした前進キャンプができあがった。カヒッナ氷河をつめてきて、ウエスト・パットレス上部尾根へ取付く、15,000フィート地点である。話し合いでは、ここからスピーディに登り降りして、次の17,000フィート・キャンプを充実させながら、チャンスをつかみ次第、頂上にアタックをかけるということだったが、これもどういうことか体で理解していた人は少なかった。要するに担げるだけの食糧をもって登ってみて、頂上までゆけなかったらそれまで良いじゃないかといった気持ちの人もいて、隊を二つ、三つにわけて行動を始めてみると、最高キャンプへ上がったきり動かない人、絶好のアタックス日和りをみすみすボッカに使っている人など、最後まで足並みは揃わなかったのである。

ここには、複数のチームに別れて行動するというタクティクスが理解されていないくて、しかも、どうにかして頂上まで行こう、行かそうといった強い意志に裏付けされていないため、チーム間の連携ができなかったりする結果になっていた。この辺までなると、結局タクティクスの問題ではなくて、むしろ「人」の問題として考えなおすべきであろう。ごく基本的なところへ返ってきたが、関西登高会のように小さな、旗印のはっきりしたグループで、長年一緒に登ってきた人ばかりといった場合には気がつかなかったことであった。

#### (付 記)

マッキンレー峯の冬季初登は、二月二十八日、アート、ディヴ、レイの三人によってなし遂げられた。

しかし、私達は、ジャック・バトキンをクレバス事故で失っていた。ドリュの西壁や冬のグラウンド・ジョラスなどを登り、アラスカーの難峯といわれたハンティントン峯遠征の際には、リオネル・テレイが絶讃していた男だったが、短いつきあいに終ってしまった。

本稿は関西登高会遠征報告書「セント・エライアスとマッキンレー」(1967年刊)中の「アラスカの山とタクティクス」 という1章より枝萃したものである。文中にも書いてあるがもう少しつけ加えると、氏は1964年関西登高会の手で行なわれた「全日本山岳連盟セント・エライアス峯遠征隊」に参加、登頂し、そのままAnchorageにあるAlaska Methodist Univ. に留学、翌年やはり同会の手による「マッキンレー峯遠征隊」に参加、Boston近郊のクラーク大(大学院)に留学の後、1967年厳冬期マッキンレー峯遠征国際隊に参加された。(付記にもある通り、この隊のRay Genet, Art Davidson, Dave Zobnstonの三人がマッキンレー冬期初登に成功した。)

氏は他にも、関西登高会ダウラギリIV峰(7661m)遠征計画に参加、1967年、偵察に行かれた。(翌年の本隊はIV峰は断念したもののVI峰-7268m-の初登に成功した。)尚、この報告書「DHAU LAGIRI・VI - 関西登高会1970ヒマラヤ登山報告書」は、氏の好意により本学図書館に収めさせていただいた。

氏は本年夏も、府岳連アラスカ合同隊隊長として参加、再来年はダウラIV峰に行かれる予定である。

# カフカス 散策

—1971年夏—

田村俊介

## 1. エリブルース山麓へ

私はカフカスの北玄関、ミネラルヌイ・ボードイ空港で、七年間という長さで空白になっていた自分の記憶をまさぐっていた。

それは七年前の1964年の七月下旬のことであった。黒海の北西端にあるオデッサ港で、日本より送った車を受け取り、私達は走った。オデッサからウクライナの主都キエフを経て、ハリコフに至るソ連の大穀物倉庫、ウクライナ大平原を遮二無二トヨタ・マスターラインをぶっ飛ばした。その間約1500キロメートル。日本列島を三分の二縦断したのと同じ距離である。しかし、この間に私達が山と呼ぶ大地からの尖起には全く一度もでくわさなかった。全てが驚異的なまでに打ち続く大平原であった。私達はカフカスを目指していた。そして、ハリコフを過ぎ、ロストフ・ナ・タヌーでドン河を東へ横切り、東へ東へと向い、このミネラルヌイ・ボードイに入ってきたのは八月二日の夕方だった。

あの時はもう夕方近く、黄昏が辺りを覆い始めていた。その中で突如として、高さこそ七・八百メートルに満たないが、山が、禿山が前方に現れた。正にこれは大地からの尖起であった。平原に続く平原を、突っ走って来た私達にはそう思へた。私達は心の中で叫んだものだった。やっと、やって来たぞ、カフカスにと。その時、私達にはこの禿山がカフカスの門衛のように思われた。

それは夕陽の残照を受けて、山頂から砂塵を撒き散らしながら、黒いシルエットになって鮮明に浮き上がっていた。

この禿山が、今私達の立っているミネラルヌイ・ボードイ空港の西方真近に、聳えている。禿山は今日も又、北カフカス高原の夏の強風に煽られ、赤茶けた砂塵を全身に浴びて物憂く降起している。この坦坦と拡がる北カフカスのステップの中であって、何か場違いの感じだ。この小高い禿山は私の記憶を急速に現実のものに浮彫りして行った。

ミネラルヌイ・ボードイの空港に飛行機が着いた時、タラップの下では、インツーリストの若い女性ターニャが待ち受けていてくれた。ソ連では外人が飛行機に乗ると、出発空港のインツーリストから到着空港のインツーリストへ出迎えの指示が行くのである。

カフカス最高峰、エリブルースの南山麓のバクサン谷にあるテルスコル行きバスの切符はこのターニャが手配してくれた。私達の席はインツーリストの計らいか、それとも偶然か、最前列の運転手の斜め横で、道中の景色が最も良く見えるところだった。

バスの乗客は殆んどが青年男女のツーリストで賑やかである。バスの隅の方では物静かにエリ

ブルース山麓の住人、黒髪、黒眼、色の浅黒いバルカル人が数人モスクワで買物をしたのか、大きな南京袋を持って乗り込んでいる。

バルカル人はカバルジノ・バルカル自治共和国の住人である。この自治国は、北はミネラルスイ・ボードイのすぐ南下にロシア共和国との境を、南はカフカス主脈上にグルジア共和国との境を持っている。主都はナリチクにあり、カフカスの峻峰群の犄めくバクサン地区やベゼンギ地区などもこの自治国の中にある。自治国の人口は約54万人、その内カバルダ人20万人、バルカル人4万人、ロシア人17万人、その他の人種となっている。カバルダ人はロシア平原から移住して来て、現在は比較的山岳低地部に居住しているのに対し、バルカル人はこの山地の原住民で、自分達を自分達の言葉で「タウルゥ」即ち「山人」と呼んでおりバクサンやチェグムなどの溪谷をはるかに逆登った高地部に住んでいる。バルカル民族の発生は未だ学問的にも謎の部分が多いという。カバルダ人がカフカス語系の言葉話すのに対し、バルカル人はチュルク語系の言葉話し、両者とも革命前までは文字を持っていなかった。

バスは11時前に空港を出発した。ツアーリストのグループはバスが動き出すとすぐ浮かれ出し、陽気に山の歌を歌い始めた。

この光景は、飯田線の伊那北から南アルプスや、松本から上高地に向うバスの光景を彷彿とさせる。

バスはまもなく、マシユク山の中腹より山麓にかけて広がっているピャッチゴルグスの町を通り過ぎ、バクサン村からカフカス環状道路と分れ、テエレク河の支流バクサン川に沿ってエリブルースの山麓へと方向を転じた。バクサン川の右岸に沿って、バスは草原の中を走っていたが、やがて前方に緑に覆われた低いカフカス前衛山脈が姿を見せて来た。これはパーストビシイ山脈である。

カフカス山脈の中央部北面ではカフカス主脈はこのパーストビシイ山脈を第一前衛山脈とし、更にもう二本の山脈スカリスティ山脈とパカボイ山脈を北より順に配し、近づき難い自然の要塞を築いている。しかし、この三本の山脈は北面より流れ込むテエレク河の数多い支流にずたずたに切断されており、一本の連続した山脈の形態をとっていない。山脈の連続性からみれば、テエレク支流によって分断されているそれぞれの部分は、主脈よりパカボイ山脈を経てスカリスティ山脈、パーストビシイ山脈と南北に縦につながっていると考える方が理解しやすい。

この緑に輝くパーストビシイ山脈に突き当たり、北カフカス平原は終る。この山脈を押し退けるようにして入り込んでいるバクサン川は、広い溪谷となり、更に奥へ奥へと続いている。

と、突然、先方真正面に泰然自若と居座っている巨大な雪の塊が出現する。この山は周囲の緑の山、岩の山を全て側へ押しやり、自分の雄姿を誇示し、中空にずんぐりした白い両肩を怒らせていた。ツアーリストの若者達はエリブルースだエリブルースだと騒ぎ出したが、私の横に立っていたバルカル青年は、小声であればエリブルースでなくドングース・オルンだと私に囁いた。チュルク語でドングースは豚、オルンは収場という意味で、この山の北斜面に豚が水浴びしている水溜りに似た湖があることから、こう名付けられている。この山とは、私達はカフカス滞在中、



毎日顔を合わせることになる。

バスはティルニアウズという集落に入り小休止した。このティルニアウズには1920年代までは全く人が住んでいなかったのだが、地質学者達がここにモリブデン鉱を発見して以来、モリブデン鉱の掘さく場が作られ、集落の形をつくったのである。ここからしばらく奥へ入ると、岩と雪のパカボイ山脈が両側に現れてくる。ヴェールフニイ・バクサン村はエリブルース地区の入口に当る。この村で西北からクイルティク川が、東南からアディル(R)・スウ川がそれぞれバクサン川に合流している。ヴェールフニイ・バクサンは1966年、クイルティク川の鉄砲水によって半壊されたが、今は元の姿に復旧している。氷と雪に覆れた山山の間を流れる奔流アディル・スウを東へ遡行して行けば、3757メートルのメスチャ峠に出、ここから南へ下降すればカフカス山脈南面のメスチャ村に出る。

バスは更にアスファルトで舗装された道路をバクサン谷に沿って登って行く。バクサンとアディル(L)・スウ(前述のアディル・スウとはアディルのRとLの相異がある)の合流点でバクサン谷に沿った道路は西へ方向を転じる。ここから終点のテルスコルまでの間には、アディルL・スウ・キャンプ、エリブルース・キャンプ、バクサン・キャンプ、テルスコル・キャンプ等数多くのアルピニストやツーリストの登山基地が点在している。エリブルース・キャンプ等は鉄筋三階建ての堂々たるものである。

終着駅テルスコルの一つ手前のイトコルで私達はバスを降りた。午後三時を少し過ぎていた。このイトコルのバス停のすぐ横に私達のこれからの宿泊所、イトコル・ホテルがある。ミネラルヌイ・ボードイからイトコルまでは173キロ、約四時間の道程であった。

イトコル・ホテルは鉄筋四階建てで、海拔2000メートルの高度にある。1963年に建設されている。ホテルからはエリブルースは前山に遮られて見えないが、ドングース・オルンが目の前に巨大な北壁を晒し出している。

ここで私の道連れになってくれた田中さんを紹介すると共にどうやってカフカス行きの許可を取ったか説明しておこう。田中さんはT銀行より在モスクワ日本大使館に派遣されている駐在員で、慶応大学時代から山が好きで、日本の山をあちこち歩いている。今年の夏休みこそカフカスに行こうと、私はモスクワのインツーリストやアルピニズム連盟に掛け合ったが、どうも色良い返事が貰えない。山に入るには団体でなければいけないし、もう今年はイトコル・ホテルは満員で受け付けは終わるとソ連側はいう。失望していた矢先、日本大使館からソ連外務省にイトコルを中心にエリブルース周辺に行くという主旨の手紙を書けば、すぐ許可が下りるという耳よりの情報を得た。そこで大使館で働いている人で山好きの人を探したところ、田中さんがぜひ行きたいと名乗りをあげてきた。田中さんに大使館から手紙を書いて貰ったところ、やはり団体でなければ駄目だという。団体とは四人以上をいうとのことであったので、それでは自分達の細君の名前を入れて四人で再申請しようとしたところ、ソ連外務省から二人でも団体として認めると言うて来たので、私達二人で申請した。

私達商社員のソ連国内旅行申請は外務省でなく外国貿易省に提出するのだが、この場合申請書

にパスポートを付け提出すると、パスポートの中に何日から何日の間どここの町(訪問を許可されている町は限定されている)に滞在を許可するというビザが挿入されて返って来る。それを持って国内旅行する訳である。一方大使館員の場合は一寸違っており、出発便と帰着便の月日時間と訪問先の地名を書いて外務省に提出すれば、それに対するまーの返事がなければ、この自分で作成した申請書がビザ代りになるのである。

私達は、従って、自分達で作成した七月三十一日より八月八日までイトコル周辺に滞在するという申請書を携えて、ここまでやって来た訳である。勿論、前述したようにイトコル・ホテルはシーズン中で満員であることがわかっていたので、ホテルの了解なしでやって来た。

イトコル・ホテルは案の定満員で、駄目だという。私達は待っていましたとばかり、それではこの周辺でテントを張るといふと、フロントにいた女性は慌てて奥に姿を消し、30分程たつて再び姿を現し、ちょうど二人部屋が一つ空いているといふ。当てがわれた三階の部屋で荷物を解いていると、インディリストイトコル支部の人がやって来て、今後の私達の行動予定を打合せたいといふ。

私はカフカス出発の三日前から、扁桃腺を腫らしてしまい、熱も大分あったので風邪の回復を待たため、明日は休養がてら、ケーブルでチェゲト山に登ることにした。チェゲト山はエリブルースとドングース・オルンの真中にあり、カフカスの概念を頭に入れるのに恰好の山だった。

今日は早朝の五時に起床し、私が長期滞在しているモスクワのウクライナ・ホテルを出発して来たので、まだ夕方の七時近くだったが何だか眠い。田中さんとホテルの部屋でホエプスとナベを引っぱり出して夕食を作り、食べ終るとベッドの中にもぐり込んですぐに眠り込んで了った。

#### 4. エリブルース

八月三日は前前日アディル・スウ・キャンプのユーリがアディル・スウ上流にあるカジカタシ氷河に案内してやるといつたので、約束の十時にホテルの前で待っていたが、約束の十時を過ぎ十一時になっても彼のジープは現れなかった。

何が気抜けして私はホテルの裏山の斜面で日光浴をすることにした。田中さんはホテルの裏山チェゲネクリバシ(3501メートル)へ出掛けて行った。私は裏山の斜面に窪地を見つけ、その中にエアーマットを敷いた。モスクワでは日光浴ができる期間がごく短いので長い冬を過ごすために、できるだけ身体に太陽の光を入れておかねばならない。風邪の方が心配だったが、もう殆んど良くなっているように思えたので、私は海水パンツ一つになり、エアーマットの上にごろりと横になった。裏山から吹き下す風はちょうど私の上を吹き抜けた。山の斜面では二三人の男が等身大の柄の付いた大きな鎌でゆっさゆっさと調子を合わせて草刈りをしていた。女達は大きな熊手で男達の刈り取った草を一所に集め草叢を作っていた。

ジャージャーという草を刈る鋭い鎌の音が私のところまで心持良く響いて来た。八月の初めと

いうのに、山はもう秋を迎えようとしているのか、近くで虫の鳴く声が聞える。三時近くになって黒い衣服で顔も身体も包んだお婆さんが、大きなやかんとおやつのようなものをぶら下げて、下から登って来た。男や女達は婆さんの持って来たものを囲み、静かに輪を作って一休みした。

バクサン谷の下方、ちょうどアディル・スウとの合流点の後方にアンディン・チイ（3937メートル）がずんぐりと盛り上っていた。穏かな一日だった。四時を過ぎると、田中さんが山の中腹を下って来るのが見え、四十分後には僕のところまで下って来た。チエゲネクリ・バシの上部はガレ場になっており、雨が降って来て視界が利かず、瓦礫がガラガラ崩れて危険だったので下りて来たということだった。そう言えばこの山の上部だけは、始終ガスがかかり何も見えなかった。

私達が夕方ホテルに帰ると、インツーリストがやって来て、明日東ドイツのツーリスト・グループ十五人がエリブルースのプリウト・アジンナツァチ（十一人の避難小屋）まで行くが一諸に行かないかと言う。但しプリウト・アジンナツァチに一泊して、翌日にイトコルまで彼等と一緒に帰って来るのが条件であるという。

私達の滞在予定はあと四日間あったので、これをフルに使い、中一日を高度順化のためにさき、エリブルース頂上まで行くことをインツーリストに申し入れたが受け入れられなかった。理由は私達はインツーリストのホテルに泊っているのだから、あくまでインツーリストの指示に従って欲しいという、理由になにならぬ理由からだった。どうしても埒があきそうにもないので、こちらが折れて、東ドイツのツーリスト達と一緒にプリウト・アジンナツァチまで二日の予定で行くことにした。

翌朝四時三十分にホテルからドイツ人の一行十五名とバスに乗り、バクサン谷の更に奥のテルスコルまで行く。この間約十五分。ここでバスを降り、巾広い登山道を登って行く。ドイツ人のグループは老若男女の混成隊であったが、全員ニッカ・ズボンに長ストッキング、登山靴としっかりした恰好をしている。グループをガーリヤというドイツ語を話す、三十才前後の女性が先導した。彼女はインツーリスト・イトコルの通訳兼案内人である。このガーリヤの後をドイツ人のグループは整然と列をつくり一糸乱れず歩いた。私と田中さんはこの列の最後尾を付かず離れず、ぶらぶら歩いて行った。田中さんはドイツ語ができるので、最後尾にいた若い青年と話をしていたが、その話によると、彼等はベルリンで旅行社がカフカスの山の旅の会員を募集し、それに応じて各地方から人人が参加し、このグループができたということである。私はドイツ語ができないので、朝の太陽の光に刻々とその色調を変えて行くカフカスの山並みを見ながら歩いた。登るにつれて、カフカス山脈はその全貌を徐徐に現わしてきた。

途中「105人のピケット」で休止した。ここは草原状に開けた広場で、小さい山小屋が三、四軒ある。我々は朝露に濡れそぼった草地の中の処処に露出している岩を見付け、そこに腰を下ろしお茶を飲んだり軽い食事をとったりした。

それから更に登った。もうすっかり視界は開けていた。雲は少しあったが、目の前の深深と雲海の中に沈んだバクサン谷の向い側には巨大なドングース・オルンの山塊が傲然と構えており、そ

の右肩には少女のようにこのドングース・オルンに寄り添う正三角の均整のとれたナクラがあった。東方に目を移して行くと雲海が張り出し、ドングース・オルンに続く山並を隠していたが、カフカスーの名峰ウシバだけはその双耳峯を、海面すれすれに泳ぐ巨大な魚が二枚の背鰭を水面から覗かせるような恰好で、雲海の中から突き出ている。濃い真綿のような雲海から離れた薄いベールのような雲が、この二枚の背鰭にまわり付いては離れていった。

レドヴァヤ・バザ氷の基地まで五時間以上歩いたろうか、もう正午に近かった。このレドヴァヤ・バザは、両側を巨大な氷河にはさまれて小高くなっている丘陵状の屋根の終るところに作られた山小屋である。この先はすぐエリブルースより下りて来ている雪面に続いている。小屋の周辺には、これから上の雪面に出るツーリストやアルピニスト達がズック靴を登山靴に履き換えたり、ヤッケを着たりしており、活気に溢れていた。私達はこの小屋で熱い紅茶を貰い小休止した。又小屋のシラフザックの中に入れる木綿のインナ・ザックも受け取った。小屋の横の岩の重なりの上に、大きなレーニンの頭だけの像がどっかり置かれてあるのが一寸場違いのような感じもしないではなかったが、これも又ソヴェト的で良いのだろう。

ここからすぐ雪面に出て、雪の上を登って行った。処処にクレヴァスが口を開けているがそう大きなものではない。この斜面から、東峯と西峯が良く望見された。一時半頃にプリユト・アジンナツァチに着いた。

このプリユト・アジンナツァチは飛行船の胴体を半分雪の中に埋めたような恰好をしている。金属性の三階建ての建物で200人収容可能という。私と田中さん、それにドイツの二人の青年が三階の一室に入れられた。

部屋には簡易ベッドが四つ置いてあり、シラフ・ザックと毛布が当てがわれている。二階の食堂では昼食のマーンナヤ・カーシャ（小麦の碾割の粥）が作られた。小麦の碾割はインツーリストから支給され、ドイツの女性達が作ってくれた。

プリユト・アジンナツァチは4200メートルの高度にあるせいか、なにか頭痛がして頭がぼんやりしており、昼食後シラフに入って仮眠をとった。夜は魚の缶詰が支給されたきりで、私達はクラッカーを噛りながらこれを食べた。第一日目チェグト山に行った時、道中知り合いになった跛の青年チムールもこの山小屋に手伝に来ており、このチムールとこの山小屋で手伝いをしているチェカンカ（金属の板を叩き出し絵を浮き彫りにしたもの）を作っている彫刻家でスキーヤーのヴァロージャと小屋番の部屋で夜遅くまで世間話しをした。

余談になるが、このヴァロージャとはすっかり友人になり、私がモスクワに帰ってから、彼の傑作、直径80センチもある円形のバルス（雪豹）のチェカンカとこれも同じ位の大きさの正方形のワシリ・オブラジエンヌイ寺院のチェカンカを彼は送って来てくれた。

翌朝は五時に起き、写真を撮りに外へ出た。30分程上へ登りカフカス山脈のパノラマ写真を撮る。背後のエリブルースは膨大な雪の累積のはるか彼方、雲の中に姿を隠していたが、南に広がるカフカス主脈の山山は、幾本もの支脈の上に聳える山山と重なり合い、波濤となって視界の届く限り轟き合っていた。西には西カフカス山域にあるグヴァンドラ（3983メートル）が、

南西にはラクラ（3758メートル）が、正面の雲海によって埋め尽されたバクサン谷の向う側にはドングース・オルン、ウシバ（南峰4710メートル、北峰4694メートル）、チャトゥイン（4364メートル）、ブジェドッフ、ウルカラが肩を押し合っていて並んでおり、はるか東方にはベゼンギ地区にあるカシタン・タウ（5144メートル）が壮大な山容を黒黒と浮き上がらせていた。

やがて朝の一番の光線が矢のようにこれらの峰峰の上に走った。山並みはスポット・ライトに照らされたように中空に浮び上って来た。風は絶え間なく、写真機の三脚を揺すり続けたが四十分程ねばってカフカスのパノラマ写真を撮り終えた。背後のエリブルースはついに姿を現わさなかった。

ここでエリブルースについて簡単に紹介しておく。

カフカスの最高峰エリブルース西峯は5633メートル、東峰は5621メートルある。西峰はヨーロッパ・アルプスの最高峰モンブラン（4810メートル）より823メートル高い。この双耳峰はカフカス主脈の北10キロメートルの地点に独立峰のように聳えるが、稜線によって主脈につながっている。

エリブルースという名は今でこそ固定した名称になっているが、かつてはいろいろな民族からいろいろな呼名で呼ばれていた。

チュルクの呼称は「ジン・パディシャフ」で聖霊の王、イラン呼称は「アリボルス」で高いの意味、これが現在の名前エリブルースにつながる。チェルケス呼称は「クウスカ・マフィ」で幸福をもたらす山、カバルダ呼称は「オシ・ホマホ」で昼の山、バルカルやカラチャイでは「ミンギタウ」で千ある山の中の山、グルジャでは「ヤルゥプス」雪のたてがみ、そしてロシア人は十九世紀頃には「シャト山」雪の山と呼んでいた。

東峯の初登は1829年、エマヌエル將軍の率るロシア科学アカデミーとカフカス前戦隊からなる遠征隊がエリブルースを目指した時、その時のガイド、カバルダ人のキラル・ハシロフによって成された。

しかし、ヨーロッパでは初登攀の証拠なしとして、1868年同峰に登ったフレッシュフィールド、タッカー、ムール（以上イギリス人）デヴァーシー（フランス）の一行を初登攀者としている。

最高峰の西峰にはグロフ、ウォーカー、ガルジナ（以上イギリス）、クヌーベル（オーストリア）がバルカル人のガイド、ソターエフと共に1874年に初登頂した。

ブリュト・アジナツァチから頂上まではパストゥホフの岩を経てコルに出て（所要時間五～六時間）東峰（コルより一時間～一時間半）西峯（コルより一時間半～二時間）に達する。下りは頂上よりブリュト・アジナツァチまで三時間半～四時間半である。

八時になって、雲の中のエリブルースに別れを告げ、下り始めた。南面の山並みは雲が張り出して来て殆んどその中に姿を消していた。

途中、レドヴァヤ・バザで、昨日ドングース・オルンへ行くのでザイルを貸してくれとやって

来た私達の向い部屋のポーランドのタトラ山のガイド、ブルゾフスキイに会った。ザイルは私達の部屋に入れておいたといい、ドングース・オルンは一日では無理で、ナクラ・タウまで登り、引き返したということであった。彼等も東ドイツ・グループと同様、インツーリストのオルガナイズしている「カフカス山の旅」に入りやって来たが、山に自由に登らせてくれないとこぼしていた。私達は正午過ぎにイトコルに帰り着いた。その日の夕方、明後日の七日よりオーストリアから大挙してアルピニストのグループがやって来るので、七日は山を下りてピャッチゴルスクへ行って欲しい。ピャッチゴルスクのホテルは予約済みであると言う。私はピャッチゴルスクのレールモントフの博物館を一日がかりで見たいとかねてより思っていたし、日帰りでは山にも登れないので七日に山を下りにした。

八月六日は朝から曇天で、この日はベチョ峠まで行こうと思っていたが、これでは写真も撮れそうにないので、荷物の整理をすることにした。昼過ぎ、日本大使館の藤元さんの弟さんがヒマラヤ登山の帰途にあるという友人と二人でイトコルにやって来た。私達は最初は彼等と一緒にカフカスに来る予定であったが、こちらは会社勤め、向うは学生で私達の方が時間の都合が付かず別別の行動になった。彼等は中央カフカスの東端のカズベク山に登り、今日はピャッチゴルスクからタクシーでやって来たのだった。しかし、ホテルは満員で、インツーリストは部屋が無いので、今乗って来たタクシーでピャッチゴルスクまで帰ってくれと言っている。彼等は粘りに粘ったが、結局埒があかず、インツーリストの反対を押し切って、それではテントを張るとザックを担いで、テルスコルの方へ登って行った。インツーリストは渋面をつくっていたが、彼等は外務省のビザだし、まあ好きな様にさせておく、と言っている。私達も外務省のビザなのに、なぜ私達の行動を制限するのかと聞くと、インツーリストのホテルに入った以上はインツーリストの指示通り行動して貰わないと困るという。

後で聞いたところ、藤元さん達はホテルに泊れなかったことが不幸中の幸で、インツーリストの世話にならずに、一週間程かけてエリブルースに登って来たとのことだった。

八月七日、前日にインツーリストにピャッチゴルスクまでの切符を買わせておいたが、ポーランドのブルゾフスキイが我我もチャーターしているバスでピャッチゴルスクまで下るから、一諸に乗って行けと誘ってくれる。座席も十分余っているということだったので便乗させて貰うことにした。ブルゾフスキイはプリユト・アジンナツァチからやはりインツーリストの反対を押し切り、朝二時に出発して頂上へ向ったが軟雪のため、コルまで登って引き返して来たということだった。

イトコル・ホテルを後にし、約十五分程バクサン谷を下ったところにミネラル・ウォーター「ナルザン」が湧き出ているところがあり、ブルゾフスキイの発案で、ここでカフカスの甘い味のするミネラル・ウォータを腹一杯飲みカフカスに別れを告げた。今日は快晴だった。バクサン谷に沿ってバスはどんどん下って行った。バスの後方に長い間見えていたカフカスの山山もやがて視界の中から消えて行った。

大阪外国語学校

『部報』 抜粹

附、名簿





巻頭	に	白井正
小感		白井正
山岳部は私の健康の母である		吉野美弥雄
有	峯	畠中敏郎
岩登り A B C		S T 生
六甲の岩場		森中敏彦
遭難再観察		藤原生
日本北アルプス縦走所感		辻敏文
剣岳		梶山良里
毛無山の一日		中所佑生
関燕赤倉スキー記録		三角生
乗鞍の日記		吉田八郎
スキー礼讃		真野太一郎
遍路行脚の心		栗田良雄
山に学ぶ		竹田潮路
スキーと兵隊		上田彰夫
所感		平田正典
行事報告		
後記		

「部報第1号」 昭和14年2月20日発行  
A5版 孔版57頁

## 巻頭 へ

白井 正

昨春「旅行部」が「山岳部」と改称されたに付ては我々部員一同は改称に伴ふ実質の向上により校友の期待に背かざらん事を誓ったが、過去一年足らずの実跡を顧みると上級生部員の指導と新入部員の生気潑刺たる努力とにより「山岳部」として名実共に恥しからぬ業績を挙ぐる事が出来た。勿論その業績は他校山岳部のそれに比しては尚極めて貧弱なアルピニズムの初歩にすぎないもので、我々は之で満足して居るものではない。我々は将来への曙光が見えた事を喜びとして更に山への精進に拍車をかけ度いと思ふ。

かゝる部として劃期的な年度を送るに当り「旅行部」時代の締めくゝりをなし、又将来への覚悟を深くする意味に於て、我々はこゝに初めて部誌を発行するものである。

## 劔 岳

梶 山 良 里

平和そのものの様な、五色ヶ原の小屋を朝早く発って、立山を越え一日中山気身に浸む尾根に行く、夕方近く尾根の將に絶たれんとする所まで来ると、遙か下の方に小さな長方形の石の塊が見えた。之が我々に安らかな眠りを与へて呉れる筈の劔沢の小屋なのだ。然し之が案に相違して、我々を恐怖のどん底に落とし込む、劔沢の小屋だったとは。

小屋を見付けた我々は、鶉越の逆落しの如く、険しい道を飛ぶ様にして下ったのであった。ほんの豆粒位に見えた小屋が、握拳大になり、頭位になり、人身大になったかと思ふと、暫く雪溪の影に隠れ、再び現はれた時には、立派な石垣をめぐらした山小屋になっていた。しかも子分でも引きつれた様に、五六帳の天幕をも縦へていた。

一行は正に躍らん許りにはしゃぎながら、小屋に着けば、すぐにコーヒを沸すのだとか、リュックを置いて直ぐスキーをするのだとか、罐詰を開けるのだとか、一同はまるで子供の様に喜んでいた。

小屋に着くと、十二畳位の部屋が我々一行のために提供され、熱いお茶にお菓子が出された。之が又、我々一同に取ってはこの上もない御馳走なので、スキーをやる積りだった者も、コーヒを沸す筈だった者も、先づ茶を吸り、大阪では見向もしない様な菓子を奪ひ合ふ様にして、チョコレートかなんかの様にお美味さうに食べるのであった。

ここで一同の計画がガラリと変って、コーヒを思った者も、スキーを考へた者も、懐しい家への便を出す事になった。

小屋の売店で絵葉書を選んだり、スタンプを捺したりして居ると、突然誰かが小屋へ走り込んで来て、「もう駄目らしい、誰か室堂まで電報を打ちに行つて呉れないか。」と怒鳴った。

之から悲しい事件が、明らかになって来るのだけれど、この平和な山日記を悲歎のどん底まで持って行くには忍びないし、我々の山登りには少しの関係もなかったのだから、之は別の記事に依りたい。もっとも、長次郎の雪溪を登つて行く計画の変更はあったが、之は針之木峠の雪溪の困難だった事で、殆んど九分通りまで尾根道に行く事になっていたのだ。勿論之の事件に依り確實に劔登山は尾根道と決つてしまつたのではあるが。

この事件に依り劔登山を中止するという、駄々っ子が二、三人出て来た。之には案内の神事爺さんも困つたらしく、濃は三十年間も案内しているが、その間のお客で指一本負傷したのも無いから、明日は是非皆一緒に気を着けて元氣に行きませう。と励ますのであった。然し一夜ぐっすり寝ると、勿論ぐっすり寝なかつた連中もあるらしいが、一同若人の元氣を取戻して昨夜の駄々っ子達も、喜び勇んで登山に参加する事になった。

明れば、又も日本晴の良い天気、空の青さ、雪の白さ、岩の黒さが一幅の絵の様に輝いている。朝七時、荷物を皆放り出して、弁当だけを詰めたリュックを背に、カンジキを足に、相撲の番付で進む事になった。相撲の番付とは昨日まで殿を務めたものが先頭になり、先頭が今日の殿になる

事である。

小屋から見た劔は、丁度握拳を並べた様な一見平凡な山であって、之が何うして遭難の劔だ、などと言われるのだらうかと不思議に思った。然し進むにつれて、六甲山あたりと調子が異なるのに驚いた。進むにつれて道は険しくなって来たが、初の間は先年宮殿下が登山遊ばされた時に作ったといふ階段状の道である。更に進むと、劔らしいものが目の前に聳えている、之が軍隊劔だそうだ。

こゝまでは六甲殿への力でどうやら登って来られた。白井先生は、此処で一人待って居られて、我々だけで劔登山をする事になった。高野の下で待たされた石童丸の母の様に、なんだか御気の毒だったが、先生は先年も登山されたので、今年は、軍隊劔を枕に昼寝をして居る方が満足の様だ。

それからは道なき道を猛進した。実際道がないのだ。頂上は目の前に見えているのだが、何の岩の上を通過して、何の岩に手を掛けて、何の岩に足を掛けて、次に何の足を、何んな風に移すかと云ふ事が全然解らないのだ。しかし、その難路を国道を行く様に進むのが我等の名ガイド神事さんだ。

これだけおだてると、吹かれるかも知れぬが、真逆この本を読まないだらうから安心だ。然し実際良く知っているのには感心した。それで神事さんが先頭を進む、続いて進むは昨日の殿隊の隊長、副隊長だ。隊長が神事さんの真似をする、隊長の真似を副隊長がすると云ふ風に、前者の真似をしながら、ずんずん進む。十米ほどの殆んど垂直の岩も、この人真似行進で無事通過、大の男が岩にしがみついて廻る、抱き廻り岩も指一本すりむかずに通過した。斯くの如くして頂上へ着くや、今まで血の気も無かった顔が安心やら嬉しさやらで、一時に紅潮して、一同紅顔の美少年になった積りで、劔山頂で、声帯も破れんばかりの声で萬歳を叫んだ。そして軍隊劔の山頂目がけて、石童丸の母上に「ヤッホー」の掛声を掛ける。母上もやをら立ち上って、衣の袖ならぬ、真黒の帽子を振って居られる。遠く望めば、加賀の白山、赤石、戸隠の連山、穂高、槍、爺、毛勝、猫又の山々が聳えている、この絶景を前に昼食を取る事にする、劔山頂の昼食と言へば日本一だらう。しかもそれが日の丸弁当に雪の副食物だ、その上三米程前の雪溪へ、何処から来たのか雷鳥の親子が現はれ、よちよち歩き出すのを見ながら食べるんだから、日本一豪勢だ。雷鳥が、かき消す様に居なくなったのを合図に、我々も下山を始めた。下りは、上りの青くなるほどの緊張も解けて、どンドン下山した。小屋に近づくと従って、暗い影も飛び散って仕舞った。

それから、愉快的な雪溪スキー、或ひは楽しい夕食、山小屋の入浴の後、一同気持ち良い安らかな眠りに落ちて、思出多い劔沢小屋の夢を結んだのであった。

## 山 に 学 ぶ

馬三 竹 田 潮 路

人の一生は重荷を負ひて遠き道を行くが如し、と徳川家康は人生を説いたが、此の所謂道とは当時の道であって、交通の非常に発達した現今の「道」は、例へば阪神国道の如くバスあり、電車あり、汽車あり、の状態で此の道をテくるのは凡そつまらぬことの標本である。されば家康の

名言も、近代人の耳には、人生とは凡つまらぬものであるぞよ、と解される。併し家康はそんなつもりで云ったのではない、彼若し今日在世するならば必ずや、人の一生はルックザックを背負ひて高き山に登るが如し、と訂正するに違ひない。事程左様に登山は若衆相錯綜する人の一生に例へるに最も相応しいものではなからうかと私は考へる。

出発して間もない麓の道は緩やかで何の障害もない歩きよい坦々たる道である。之は人が生れて父母の膝下に愛撫養育せられているのと丁度同じであらう。之に反して幼くして父母の愛を知らず憂き目を経験する可哀さうな人がある。之は山で云へば、例へば木樵の道にでも踏迷ひ道なき道に入り込んだのと同じでこういふ人が遭難し易いのは無理からぬ事である。さて暫く登って行くと谷に逢ふだらう。此の谷も渴を医す有難い清水ともなれば、又一方には我々の渡渉を余儀なくせしめる危険な障害ともなる。此は恰も人生に於て同様の出来事にして併も各人に禍或ひは福を齊す場合があると同様である。而して此の障害に直面しての決断こそ我々にとって実に重大な事である。即ち深慮なしの逡巡は恐しい結果を生むといふ事を我々は山の経験で実際に知った。定めた以上は断乎として決行するといふ事は山に於てのみならず人生に於ても必要な事に違ひない。渡渉を終れば、道は谷沿ひ、わかり易くもありどんどん進み得る、谷の窮るところは絶壁を為しその上には尾根が見えている。あゝあれに登れば頂上も間近だ、そこで我々は登るべき色々の手段を考へる。先づ我々は稍々上方に棚を見付けそれを目指して確固たる自信を以てホールドからホールドへと堅実に上ってゆく、そして逆層を避けて右に左にトラバースする。此の時は一步上る事、体を確保する事、それ以外に考へる事はない。而して結局岩登りの要領はそこにある。

思ふに我々が社会に出て斯の如き絶壁に直面した場合、決して焦ってはならない。時間も問題にしてはならない。身を確保し、一步々々の処理をする事に全力を注ぐべきであり、此処に於て注意すべきは如何に切抜けるより、如何に切抜けるべく一步進めるかにある事を忘れない事である。さて又此処に見逃せないのは協同の有難さである。三人なり四人のパーティが一人のリーダーの指図に従ひ、互ひにホールドを数へ合ひ励まし合ひ、一人々々につながらずザイルがまるで此の時は各々をつなぐ血管のやうにも思はれる。或人が足を踏みはずせず一連話生である。こうなれば自分の命は自分一人のものではない。皆の命である。自分の踏む足は皆の足の一本にすぎない。利己は絶体に許されない。かくして各々が己を離れ渾然と一致した協同の前には絶壁も屈服せざるを得ないだらう。

斯様に谷を涉り絶壁に攀ち雨に逢ひ風に悩まされ漸く着いた山の小屋では、囲炉裡を囲んで山男達の今日の山路の冒険談に花が咲いている。中でも誇らしげに語るは最も難儀したパーティである。苦しみを味ふ事無しに来た者は羨し相に聞いている。人生も此の通りではなからうか、短い人生である、安易に通ればケーブルカーで山に行く如く坦々として味のないものであろうし、之に反して迂餘曲折、幾多辛酸を嘗め来た人の人生は、谷あり、崖あり、高原あり、併もそこには想像もつかぬ美しい高嶺の花も咲いていたであらう。一つ一つの苦しみに今は懐しい思ひ出の種である。翻って自分の身を顧る時我々は想ひつく事が出来る。即ち現在の苦境は人生の登山

の一絶壁で、此こそ我自叙伝を飾るに相応しいものであると、又或人はこう考へる事が出来よう。即ち今行く道は高原の道、名も知らぬ草花咲き乱れ、美しき蝶も舞ふ、此こそ此の世の樂園ではなからうかと、併し併しまだまだ前途には岩あり谷があるかも知れない、此処で遊んでばかりは居られない。と、要するに我々は世間の所謂不幸なる事実も我々にとって征服慾をそゝる岩壁に外ならない事を知った。今私は卒業に当り、山で得た体験で人生の頂目懸けて前進をしようと待機している。よき岩場の数ある事を願ひつゝ。 一四・一・一九

部 報	
卷 頭 記	.....
雑 感	..... 白 井 正
山 を 讃 へ る	..... 吉 野 美 弥 雄
濡 乗 鞍 雨	..... 鳥 中 敏 郎
今 年 の 夏	..... 竹 田 潮 路
山 と 僕	..... 栗 田 良 雄
断 想	..... 梶 山 良 里
ア ル プ ス 雑 感	..... 西 村 禎 二
西 班 牙 と ラ テ ン ア メ リ カ の 山	..... 藤 原 生
(ふるさと) イサイアスガンボア原文より	.....
(アンデスの朝) フアンメーラより	.....
山	..... 西 村 生
雪 の 中 で	..... 寒 川 真 澄
湖 沢 生 活	.....
前 穂 高 北 尾 根	..... 森 中 生
北 穂 高 より 奥 穂 高 小 屋 へ	..... 藤 井 辰 朗
山 の 手 帳 か ら	..... 峰 弘
山 小 屋 の 思 ひ 出	..... 梶 山 良 里
初 春 の 行 者 還 嶽	..... 森 中 敏 彦
氷 の 山	..... 吉 田 八 郎
行 事 報 告	.....
あ と が き	.....

山の報告書(部報第2号)

昭和14年12月15日  
A 5 版 孔版 62頁

## 雑 感

白 井 正

我が山岳部もどうやら順調な成長を遂げて来た様だ。昭和六年部として初めて北アルプス縦走、それも女学生コースの常念、喜作新道、槍のコースをやった時は参加人員も十名以上と云ふ多数だった為めか相当にぎやかで、少々遊山気分も感じられた。自分としてもアルプスも初めてだし、幾分悲壮な覚悟(?)を出して出かけたものだ。その頃に比べると此の一兩年の部は全く見違える様になった。今年からは sans guide を実行し、涸沢のキャンプも未だ不完全な点もあろうととにかく無事にすんだ。日本の山岳界が慶応流の貴族的なものから早稲田流の質実剛健なやり方に漸次変って行ってる事が順調な発達だとすれば我が部もおくれはせながら同様の歩みをして来て居ると云へやう。

### 北穂高より奥穂高小屋へ

藤 井 辰 朗

北尾根を済せて全員槍、穂縦走又は逆縦走をやると云ふプランだったが、何しろ皆可成り疲れて居り又全員の参加も難かしかったので此処池の平のベースキャンプから直に北穂高沢を登り涸沢岳を経て奥穂小屋に出やうと云ふ事に二十三日変更した。

明けて二十四日森中、峰、小生の三人朝食を済ませて一休みしアイゼンの手入等してテントを出たのが既に十時頃だった。食糧として乾パン二箱、ゆで小豆一罐、後は用意としてザイルを入れたのみなので皆リュックは非常に軽く直に北穂沢へととりついた。ひどいガレに気を配り乍ら登らねばならぬのでとても厄介だ。一つ石を落しても直に池の平へ急傾斜を転げ落ちそうなのだから危くて仕方がない。何だか天候がはっきりせず蒸暑い様に感ぜられて登りにくかったが四五十分かゝりやと雪渓へと出た。奥穂の辺や前穂の辺はもう雨雲が一杯に巻いて来ている。赤沢岳の頭のみ薄陽を浴びて面白い。池の平のキャンプも小さく見えて我々のテントも判然とは解らない。此雪渓は涸沢乗越の雪渓等と共に明るく広い雪渓で気持がよくしばらくはアイゼンを附けずに登ったが南峰の頭が大分迫って来た頃からは俄然峻しくクレバスもあり小さな落石さへやって来たので直に途中のガレ迄スリップしながら登りつめアイゼンをつけた。もう北穂一帯頭の上はガスが猛烈でとても上が見えにくゝなって来たが、とにかく前方の鞍部目指しトップ森中、峰、続いて小生の順で不規則なジグザグを切っていった。とても鞍部の手前の方は傾斜が甚しく前穂第三峰より池の平への雪渓を思ひ出させた。「一つスリップで北穂沢入りのガレの上まで一瞬間だけ」と笑ひ乍ら漸く鞍部にとりついた。此処は丁度南峰の壁の下側らしい。南峰からの一稜と此の鞍部によって造られたテラス状の雪渓の上で一つテントが張られてある。(後で調べて滝谷に挑んでいる八高のテントだと云ふ事が解った) 約二八〇〇米の此辺迄よく頑張ったものと驚いた。此頃から遂に雨がぱらついて来て南峰に出た時は可成りひどく降って来てとても遠望どころか四、五米先が見えなくなって来た。丁度十二時を過ぎていたので「乾パンでも食はなきや」と

何処か岩の陰へ這ろうと思っている中に又涸沢の方から雲が切れ青空さへ見えて来た。俄然嬉しくなりヤッホーを大声でどなると目の前の北峰の上でヤッホーが聞え瞬く間に晴れてきた北峰の上で手を振っている人影を認める事が出来た。直ぐにカメラを出し晴間をあてこんで記念撮影したり、うっすら姿を見せ出した南岳や檜の頭を撮ってる裡に涸沢のカールを埋めている残雪を囲み前穂からその北尾根の豪快な稜線が見えて来た。三人とも乾パンからゆで小豆迄平げてヤッケを頭から被り狭い南峰の上で寝転び乍ら煙草をふかしているお互の姿を自分の事を忘れて笑ひ合っ  
 てのんびりと三千米のスカイラインでねばっていたが、急に風が冷く感ぜられて来た時はもう飛驒側から物凄いガスだ。「こいつは堪らねえ」と言ひ乍ら皆ガスを吸ってみる。何だか変な味とも臭とも云へない様な気がする。これからはとてもひどいガレでルートも余程気を付けていぬと外れる程で其の上先刻からのガスは凄くはり出してくる一方で益々前方が見えなくなる。滝谷の方から声がするので霧をすかして見ると二組のパーティがザイルでしっかりとジツヘルして居るのが見られた。丁度南峯から右へ岩稜をへった頃此霧の中で涸沢、池ノ平の人夫がルートを懸命に直しているのに逢ひマッチが無いとの事に分けてやり少時涸沢岳へのルートを聞いたりして、出発しやうと振向くとぐっとスカイライン迄、のし上っている有名な北穂チムニーが表れた。ガスを通して一層凄く感じられる。此処で滝谷攻撃のパーティに無事を祈ってヤッホーを叫んで一路悪場をへつり頑張った。天気さへ良ければせめて東西信州側の明るい豊富な残雪、北尾根の威容に眼を、カメラを、楽しませ得るのが今日はまた何と天候に恵まれぬ事か昼食の時だけ陽光にありつけた訳だ。それに此の西面の飛驒側は峻絶穂高切つての滝谷を控え今日のガスをかぶる姿は又一段と凄絶暗鬱の限りである。やゝ順調に飛驒側尾根を絡んで信州側へ移り涸沢岳への鞍部、涸沢乗越に出た。此処は池の平から穂高小屋への雪溪と共に登、降路として利用されているのだが今日は全然池の平の方向さへも解らぬ位である。途中追抜いたパーティが僕等が霧の中で腰を落付けている間にやっと追いついて来た。僕等と同様ルートを外れない様に迷ひつゝも苦心した相だ。実際眼前五、六米しか視野が利がなく迷っても土壇場に行く迄其が解らないのだから苦勞した。鞍部から小生がトップで出た。涸沢岳への登りは北穂の北面と共に本縦路中の悪場だが其より短く頂上直下では針金さへ今では附いているので楽になっている。即ち先づ飛驒側を登り肩へ違し涸沢側を頂上に向ひ直登するのである。可成りのアルバイトをやって頂上に達するともう穂高小屋がガスの中から浮んでる。今日は奥穂も霧の中のどっしりとした偉容を漸くアウトラインによって感知し得る程だ。唯飛驒側ジャングルムの岩稜の延びているのが僅かに窮はれた。真下の小屋迄余りのガレのひどさに呆れ乍らも二十分を費やした。やっと小屋に辿りついた途端今迄の雨も上ったのだから実際呆れざるを得ないが「此が山の天候の特色さ」と諦めて小屋の戸を開け飛込んだのが三時だった。小屋の中は今日はひっそりとしていたが暖かい茶にやっと一息ついてた時大阪辯の一隊が五人程這入って来た。奥穂に入っていた大阪薬専の連中らしかった。小生等三人は口をきくのもだるく立てつゞけに茶ばかり飲んでいたが薬専の連中が下った後池の平の雪溪を三人峰をトップとしてグリセードで一気に降りたが疲れてきてる故かよく転倒したので余り煩爽たるものでなかったのは確かである。

## 編集後記

大阪外国語大学山岳部創設十五周年を迎えるにあたり、ここに「報告」創刊号をお届けします。最初に、貴重な原稿をお寄せ下さった方々に心からお礼を申し上げますと共に、発刊が非常に遅れたことをお詫びします。

編集に際して我々が特に留意した点は、過去の失敗にかんがみ、内容の充実よりとにかく何らかのものを“出す”ことに主眼を置いたことです。本誌の意義も又、この点に見出されるべきであると考えます。内容に不備な点はたくさんあるとは思いますが、何分、編集への字も知らない人間がやったこと故、御容赦願います。

編集方針というほどのものは特になく、強いてあげるならば上に述べた様に、集まった原稿をまとめて“出す”という事になるのですが、この際どうしても取り上げておきたかったことが三つありました。第一は、創部以来十五年間の部の歴史を記録に留めるという事。第二は、この間に亡くなられた村上さん、坂東さんの追悼を行なうという事。第三は、この報告書を部に関係したあらゆる人々の交歓の場とするという事です。

第一点については、高橋さんの「山岳部再建の経緯」と十五年間の山行記録、加えて畠中先生、白井先生、平井さんの寄稿文により、戦前、戦後を通じての外大における山岳活動がほぼ判ってもらえるのではないかと思います。

尚、「創部」、「創刊号」という表現について少し述べておきます。

戦前の旅行部が山岳部と改称されたのが昭和十三年のこと、そして部報も第二号まで出ており、本号は実際には第三号となる筈なのですが、高橋さんが「……尚、“部の再建」という表現ですが、当時の私達には再建という意識はまるでなく、わずかに畠中先生（仏語）がかつて山をやっておられ、その時には外大にも山岳部があったらしいという程度でした。……」と言っておられる様に、戦後の山岳部が、戦前の山岳部の延長線上に作られたものではないという所から、敢えて「創部」、「創刊号」という表現を用いました。この点ご了承願います。

次に、不帰で遭難死された村上さん、徳島で事故死された坂東さんと、部はかけがえのない人を二人も失ったこととなります。亡くなられてから既に何年にもなりますが、これまで部から追悼集を出していないことや、お二人が生前特に親しかったこともあって、今回改めて追悼集を編みました。村上さん、坂東さんのご冥福を心から祈る次第です。それと共に、我々現役にとっては、この様な事故を二度と繰り返さないことが、お二人の一番の追悼になるのだということを肝に銘じておきたいと思えます。

第三点については、OB会というものが確立されていない現在、この部報がOB、現役間の唯一のパイプ役を担うものと考え、出来るだけたくさんの方々に書いてもらう様努めました。が、OBの方々の筆は重くなかなか集まらなかったのが本当のところ。今回書かれなかった方々には次回に書いていただくとして、OBの消息もほとんど判明したことでもあり、今後は現役、OBの関係をもっと密なものにしていきたいと思えます。

海外特集として、西前さん、田村さんから記事をいただいた。田村さんはモスクワにあって、仕事のかたわらソ連の登攀記の翻訳等もされている。又、西前さんは再来年にはいよいよタウラギリⅣ峰に向かわれる予定である。是非とも成功されることをお祈りしたい。



部報を出そうという話が最初に出たのは、私が入部して間もない頃だった。今こうして、やっと日の目を見たと思ったら、もう目前には卒業が迫っている。従ってこの報告書は、部にとっては十五年間の総決算であると共に、私個人にとっては大学生活の総決算となった。それだけに編集を終えたあとの満足感は、又格別のものだ。本誌が部員諸君の今後の山登りに何かの役に立ってくれば、それだけでも編集委員の苦勞の甲斐があったというものだ。

本誌発刊に際しては、各方面に多大の迷惑をおかけした。この紙面をかりて許しを乞うと共に、御協力、御理解に対して心から感謝する次第である。 [ 榎野 ]

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

我々がこの部報に取りかかったのは昨年（1971年）の春であった。船井が中心となって企画し、記録の整理・原稿集めにかかったのであるが、思うようにはかどらなかつた。年度が改まって、榎野・山田が受け継いで担当し、実に2年近くかかって漸く実を結んだ。

この部報に取りかかって間もない頃、丸山先生のお口添えて、戦前の旅行部の平井典嗣氏が快く寄稿して下さいたにも拘らず、氏の生前にこの部報をお届けすることができなかつたことは悔まれてなりません。今はただ氏の御冥福をお祈りするばかりです。

部報の編集と並行して、OB名簿の整理にも力を入れ、今まで消息のわからなかつた多くの方々の消息を掴むことができた。戦前の山岳部についての情報も得られ、特に部長をしておられた白井先生には直接お目にかかる機会を持つことができた。

「もしかある日」はOB西前氏が在学中（1957年）に作曲し“島次郎”のペンネームで発表された曲で、山男なら誰でも知っている名曲である。

田村氏からは、はるばるモスクワから貴重な原稿を送っていただいたが、紙幅の都合上残念乍らそのすべてを紹介することができなかつた。

追悼文集「山と泉」は、村上さんの一周忌（1965年5月）に当って御母堂が編まれたもの。

「光みなぎるところ」は創部時代の部誌ノートで、当時の活動を知る貴重な資料となっている。

尚、OBの執筆者の語科・卒業年を、文末に略号を用いて注記し、在学生については山岳部歴によって記した。

## 報 告

昭和48年3月25日印刷

昭和48年3月31日発行

編集委員 船井 総一

山田 昭一

榎野 喜代志

発 行 大阪外国語大学体育会山岳部  
〒543 大阪市天王寺区上本町八丁目  
大阪外大体育会内

印 刷 紉 書 房